

キーワード：全校合同、小中連携、タイムマネジメント、保護者の巻き込み、キャリア教育

I 研究について

1 本校の実態と課題

本校では、令和3年度から県教育委員会の指定を受け、情報モラル教育研究校として実践を積み重ねている。昨年度は、情報モラルについて生徒一人一人が「自分事として捉える」ことを重点事項に掲げて研究を進めてきた。その成果として、学校全体で情報モラル教育に計画的・組織的に取り組む体制が構築され、教職員の意識も向上してきている。

一方で、継続して指導してきたにもかかわらず、情報モラルに関するトラブルが発生している。情報モラル教育を実生活の中で正しい判断に結びつけていくことの難しさや継続した指導の必要性を強く感じている。

5月に全校生徒対象として実施した「ふくしま情報モラル診断」では、適切な考え方を選択する問題の正答率が低い傾向にあった。また、自分専用のスマートフォンの所持率は55%、インターネットの平日の使用時間は3人に1人が3時間以上であることがわかった。実際の生活場面を想定した指導や、生徒自身が自ら考え行動できるよう重点事項を見直していかなければならない。

そこで、昨年度まで重点的に取り組んできた「自分事として捉える」指導を継続し、「情報端末を自律的に使いこなす生徒」の育成を重点事項に加え研究を推進していく。さらに、保護者や地域を巻き込んだ情報モラル教育についても研究を深めると共に、本校職員の指導力向上を目指すこととした。

2 実践概要（授業実践，授業研究会等）

時 期	実 施 内 容
5月	「ふくしま情報モラル診断」「情報モラルアンケート」による実態調査
5月17日	第1回校内研修「ふくしま情報モラル診断」について
6月19日	第2回校内研修「実態調査結果及びカード分類比較法」について
7月7日	第1回校内授業研究会 学級活動(オンラインでの1・2学年合同授業) 指導助言者 静岡大学准教授 塩田真吾様 (オンライン) 講演会講師 静岡大学准教授 塩田真吾様 (オンライン)
7月	第3回校内研修 NITSのオンライン研修 「情報社会に主体的に参加をする態度を育む指導」について
9月4日	地区別研究協議会で発表
9月21日	第2回校内授業研究会 学級活動(小・中連携授業) 指導助言者 静岡大学准教授 塩田真吾様 (オンライン)
12月	「ふくしま情報モラル診断」による実態調査
2月6日	地区別研究協議会で発表
2月	「ふくしま情報モラル診断」による実態調査
2月	第4回校内研修「実践のまとめ」について

Ⅱ 研究の実際について

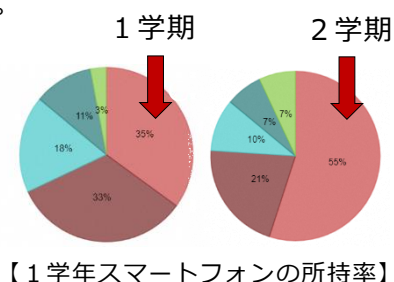
1 校内での実践

【ふくしま情報モラル診断の活用】

①生徒・保護者への実態調査

本校では、学期ごとに情報モラルに関する実態調査を実施している。今年度から「ふくしま情報モラル診断」を利用したことで、実態把握に客観性が増している。また、データの比較が容易にでき、生徒の変容を捉えやすくなった。

実態調査方法	対象	1 学期	2 学期	3 学期
ふくしま情報モラル診断	生徒	5 月実施	12 月実施	2 月実施
	保護者	5 月実施	12 月実施	2 月実施
自校作成のアンケート	生徒	5 月実施		
	保護者	5 月実施		



②保護者の巻き込み

2 学期の三者面談で「ふくしま情報モラル診断」の案内文書を保護者に配付し、周知を図った。子どもの端末利用について、懇談の話題になったようである。



2 校内授業研究会での実践等

(1) 第 1 回校内授業研究会（7 月 7 日実施）

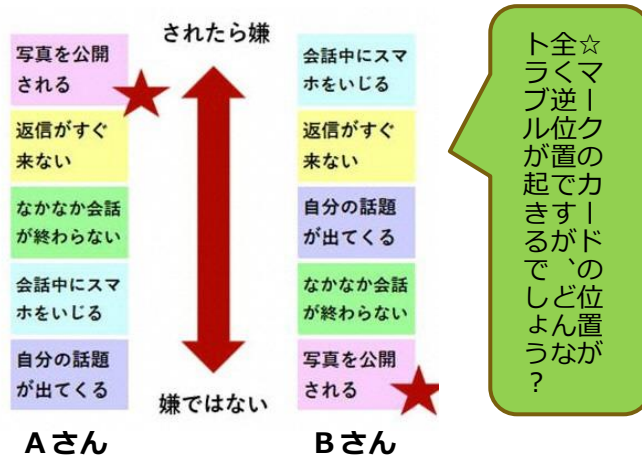
学級活動「SNS の上手な使い方を考えよう」～1・2 学年オンラインによる合同授業～
〈生徒の実態と授業構想〉

「ふくしま情報モラル診断」の結果から、特に、1 学年の生徒の正答率が低いことや、どの学年も SNS コミュニケーションのトラブルがあることが分かった。そこで、「個々の感じ方の違いから SNS コミュニケーションのトラブルが起きる」ことに気付かせるのに適した教材を選定した。また、昨年度までの取組から「保護者との連携」が大きな課題となっている。保護者が来校する授業参観の機会に、保護者参加型の授業を実践した。

〈授業の実際〉

①教材と指導の重点について

今回の授業の教材は、LINE みらい財団が作成している情報モラル教材「『楽しいコミュニケーション』を考えよう！」の基本編を使用した。観点をもとにカードを並び替え、それを友達と比較する「カード分類比較法」で学習を進めた。特に、選んだカードの違いからどういったトラブルが起きるかを考えさせる指導過程に重点を置き、授業を実践した。



②保護者参加型授業について

保護者が教室後方で見ているだけでなく、一緒に考えたり、廊下に大型モニターを設置して子どもたちの意見や考えをリアルタイムで見たりすることができるようにした。「もっと見るできないのですか」といった保護者からの要望があるなど、情報モラルに関する関心の高さがうかがえた。



教室の様子

リアルタイム



廊下の様子



特別支援教室の様子

特別支援学級では、紙のカードを使い保護者も一緒に活動した。保護者が子どもの様子を見やすいように席の配置を工夫した。保護者からは、「普段言いたくても言えないことを活動の中で子どもに伝えることができた」「子どもと一緒に活動することができてよかった」という感想があった。

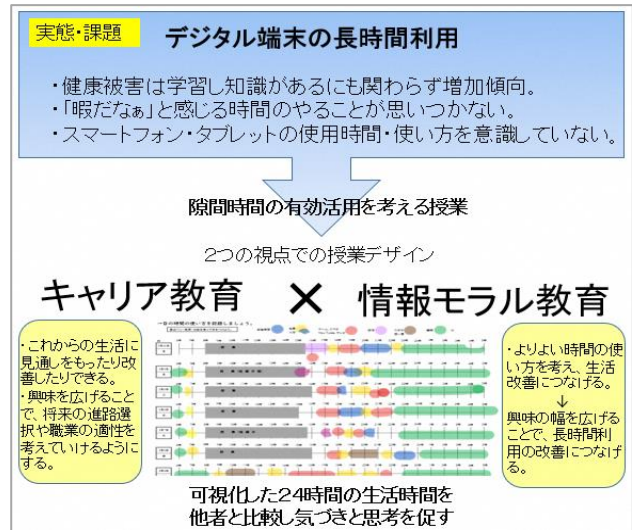
(2) 第2回校内授業研究会（9月21日実施）

学級活動「理想的な時間の使い方」～小中連携の情報モラル教育～

〈児童生徒の実態と授業構想〉

町内の小・中学校では、デジタル端末の長時間利用が課題の一つになっている。長時間利用による健康被害に関する知識はあるものの、長時間利用が減らない傾向にある。また、時間の有効活用について考えられない児童生徒が見られる。

このような実態から、時間の有効活用について考えさせることにした。時間の有効活用は、将来の進路選択や職業の適性を見極めることにつながる。24時間のタイムマネジメント表を学習資料とし、キャリア教育の中での情報モラルと位置付け、授業を構成した。



〈授業の実際〉

① 導入

授業は、中学校生活に関する小学生からの質問に中学生が答えることから始まった。中学生は自分の生活を振り返る契機に、小学生は中学校生活のイメージをもたせることを目的とした。

(キャリア教育の視点)

② 展開1：小・中の違いや共通点を考える活動



小・中学校それぞれの一週間の生活記録の平均を比較させ、班ごとに共通点や相違点を考えさせた。後半は小・中学生が交流し、話し合い活動を行った。

③展開2：「暇だな～と感じる時間」を別のことに使えないか考える活動

生活記録を比較すると、小学生も中学生もゲームの時間が長いことが明確になった。理由として、「楽しいから」「いつの間にか時間が過ぎてしまった」「暇だから」などの回答があった。

そこで、理想的な生活を送るために、暇な時間を別なことに使えないか考える活動を展開した。

暇な時間、15分・30分あったらどんなことができるかたくさんアイデアを出しましょう。なるべく「わくわく」するものを考えてみよう。

暇だなと思う時は何分ぐらい？



30分。



15分あったら何ができるか、30分あったら何ができるか、「やりたいことアイデア」を考えた。考えた内容は付箋紙に書き、ホワイトボードに貼りつけた。

(小学生はピンク、中学生は水色)



④終末：時間の有効活用を考える活動

付箋紙に書いた「やりたいことアイデア」から、自分だったら何をしたいかをワークシートにまとめ、時間の有効活用を実践することを確認し、学習を終えた。

【理想的な時間の使い方に向けた活動】

授業後、約1か月間「challenge シート」に取り組ませた。このシートは、やりたいことを実践したらシールを貼ることになっており、各自の取組が可視化できる。

実施後の児童生徒の感想には、「ゲームをする時間やテレビを見る時間より楽しい時間が増えてよかった」「YouTube などを見るより、何かを作っている時が楽しいということがわかった」など、時間を有効に活用している様子うかがえた。



(3) 研究協議会での指導助言

- ◆ 第1回、第2回ともに静岡大学准教授の塩田真吾先生に指導助言を依頼し、以下の話を頂いた。
 - ・ 7月の授業は、実施した内容と時期がよかった。今後も教科での情報モラル教育にも取り組んでほしい。
 - ・ 中学生と小学生が互いの時間を交流する実践は貴重である。また、「有意義に時間を使いましょう」で終わらない、具体的な内容が取り入れられていたことに価値があった。
 - ・ より効果的な交流活動にするためには、生活記録の「平均値」を共有するだけでなく、個々の生活記録を見せ合えば、具体的エピソードを交えた交流活動になった。
 - ・ 主題の「理想の時間の使い方」は「何のために時間を削るか？」が共有されないと考えにくい。中学生として、小学生として「どんなことをやってみたいか」「どんなことを頑張りたいか」を複数考えさせることが自分事として考えさせるには重要である。
 - ・ 「やってみたいこと」は意外に思いつかないので、教師や保護者など「大人がやりたいことに取り組んでいる事例」を紹介できるとよい。授業の最後で先生の取組を示した点はよかった。
 - ・ 保護者の活用として、「人生こんなふう楽しんでる人がいる」ということを子どもたちに伝えることが大切である。そこにはキャリア教育の視点が必要であり、キャリア教育の視点をもった情報モラル教育を今後も続けてほしい。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- これまでの課題であった「保護者の巻き込み」を重点とした授業を実践することができた。授業参観や三者面談など、直接保護者へアプローチできたことは有効であった。
- 小・中連携を図った情報モラル教育を実践することができた。また、キャリア教育の視点から情報モラル教育を推進していくことなど、今後の見通しをもつことができた。
- 校内の指導体制の整備や授業実践を積み重ねたことにより、情報モラル教育を特別な教育と意識せず、日常の問題として取り組む教職員が増えている。また、保護者への啓発や小学校からの指導の系統化など、効果的な指導方法について様々な提案がなされるようになった。

2 課題

- 研究指定校終了後も、全校体制で日常的・継続的に情報モラル教育を実践していけるようにする。
- 「ふくしま情報モラル診断」のよりよい活用の仕方について検証していく。

【参考 URL】

- ・ 一般財団法人 LINE みらい財団、「情報モラル教材」。
<https://line-mirai.org/ja/activities/activities-moral> (参照 2023-12-22)